

# ガンディーと民衆：声なき声に耳を傾けて

宇野彩子

## “My life is my message”

「インド独立の父」M. K. ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi 1869-1948) は同時代のインドの民衆にとって、大変偉大な指導者であった。その意義は、植民地支配の重みに打ちひしがれて、恐れによって行動することができなくなっていた民衆が、ガンディーの呼びかけに応えて驚くべき英雄のような勇気をもってインドの自由・自治 (Swaraj) を求めて行動したということにある、とされている<sup>1)</sup>。ガンディーは、自分自身の生涯を後世へのメッセージとする (“My life is my message.”) と述べていたが、その意味はいったいどのようなものだろうか<sup>2)</sup>。本稿では、特にガンディー思想の継承者であり現代インドの平和運動の中心的指導者の一人であったナラヤン・デサイ氏によるガンディー伝を参照しながら、この問題を取り上げたい<sup>3)</sup>。そのことを通して、多様性に満ちたインドにおいて、どのようにしてガンディーという一人の人物が、広く、多くの民衆の信頼と敬愛を集め、深い関わり合いを育むことができたのか、という問題を理解する手がかりを見出すであろう。

ガンディーは、インド独立運動を導いた歴史的な偉人として、今日の世界でも広く尊敬されている。ガンディーの独自の闘争方法は「サットィヤグラハ運動」<sup>4)</sup>として知られ、その顕著な特徴は非暴力 (ahimsa, non-violence) でそこにあらゆる階層から何百万人も民衆が男女共に参加した<sup>5)</sup>。その歴史的意義は重大であるが、私はガンディーを過去の偉大な政治家として、歴史的批判対象としてのみ研究してきたのではなく、より普遍的な、今日我々がどう生きるべきかという大切なメッセージをその生涯をかけて伝えている人として受けとめてきた<sup>6)</sup>。こうした受けとめ方を私は出会いを通して教えられ、そしてその理解は対話によって少しずつ深められて来た。そして本論文は、このメッセージについて共に考えることへの招きとなることを目的としている。

ガンディーは、インド独立直後の1948年に暗殺によって葬り去られ、その後のインドの政治的な流れは、ガンディーの願っていた方向には全く進んでこなかった<sup>7)</sup>。そして、今日のインドのナレンドラ・モディ首相に代表される、大国インドを目指すヒンドゥー・ナショナリズムの夢は、ガンディーのヴィジョンを踏みにじっている<sup>8)</sup>。それでもなお、ガンディーを生み出したインドの大地において、ガンディーの遺産をそれぞれの場において継承している人たちが草の根の活動をしている<sup>9)</sup>。そして、その遺産は世界各地で継承さ

れてきていることが指摘されている<sup>10)</sup>。私が出会ってきたガンディー思想の継承者たちに共通するしるしは何かと考えると、それは声なき声に耳を傾けて、最も苦しんでいる人々と共に歩むということにある。それはガンディー自身が実践した、生きたメッセージであるが、その道は大変な困難な自己変革の道でもあることが、デサイ氏のガンディー伝には描かれている<sup>11)</sup>。

ガンディーは最初から、今広く知られているような腰布一つ身にまとい、「マハートマ、偉大な魂 (Mahatma)」の呼び名にふさわしい、聖者のような姿ではなかった。人々と出会い、声なき声に耳を傾けるといふ道すがら、ごく普通の平凡な人物であったガンディーは、大きく自己変革を遂げたのであった。ガンディー自身は、自分の自叙伝に書いているように、自分の生涯を、万人に可能な、あらゆる人に開かれた実験として捉えていた<sup>12)</sup>。ガンディーをただ非凡の人、偉人と見ることは、私たちの現在の状況とガンディーに関わりがないと捉え、私たち自身が自らの自己変革への努力を放棄することとなり、ガンディーのメッセージを受け止めることを阻害するであろう。

## 真理の追究

ガンディーは、24才から45才までの約21年間を南アフリカで過ごした。南アフリカへ行ったのは、英国留学によって弁護士資格を得たにも関わらず職業的な挫折をして、インドで弁護士としてやっていくことが難しいなかで、活路を求めて南アフリカに一種の出稼ぎに行ったのがきっかけである。

その背景として、19世紀後半に奴隷制度が廃止されたあと、インドから、多くの貧しい人たちが安価で勤勉な労働力として契約労働者として大英帝国のあちこちに送られていた、ということがある。南アフリカでも鉱山やプランテーションの劣悪な環境に多くのインド人労働者が送られ、その後を追ってインド人商人たちが南アフリカで商売を広げていた。その中で大いに成功していた商人に、ガンディーの同郷グジャラート地方出身のムスリム商人たちがいて、その一人が、グジャラート語ができ、西洋の法律制度に通じているガンディーを、南アフリカで展開していた訴訟事件での事務担当として一年契約で雇ったのだった。こうして1893年、弱冠24才で南アフリカにひとり降り立ったガンディーは、南アフリカの人種差別について全く無知のまま到着した。この時のガンディーは、イギリス仕込みの弁護士として、流暢な英語をしゃべり、西洋風の服装をして、列車では一等車の席に座るのが当然というようなエリートであった。それが南アフリカでの20年あまりの苦闘を経て、その地を去る時には、労働者の格好をし、インドのエリートに対して母国語使用を訴え、自ら三等車の席に乗るような人物になっていた。そうした外面的な変化は、ガンディーの南アフリカでの決定的な内面的変化の表現であった。ガンディーは南アフリカを去る時に、そこでの21年間にわたる長く困難に満ちた経験を心から感謝し、自分に奉仕者 (servant) としての召命 (vocation) を与えてくれたと述べている<sup>13)</sup>。この奉仕者としての召命の自覚こ

そ、ガンディーを特徴づけるものであり、ガンディーのメッセージを受け止める鍵である<sup>14)</sup>。

ガンディーと対話するにあたって、最も基本的な文献として『ヒンド・スワラージ、インドの自治』（1909年）とガンディーの『自叙伝』（1927年上巻、1929年下巻出版）がある<sup>15)</sup>。まずは自叙伝から、ガンディーの視座と枠組みを明らかにする。別稿でもこの問題は取り上げたが、ガンディーを理解するにあたって、その重要性は繰り返し指摘する必要があると思われる<sup>16)</sup>。というのは、ガンディーの自己変革はすでに指摘したように驚くべきものであるが、それはただ場当たりに変化していったというのではなく、ガンディー自身が、人生のある段階から自覚的に非常に明確な目的意識を持って、徹底的な自己変革の道を行って来たからである。このことを明確に意識してこそ、ガンディーの生涯の一貫性が明らかになるであろう<sup>17)</sup>。

南アフリカから帰国したガンディーは、サットイヤグラハによってインドでスワラージ（Swaraj, 自治、自由、自立）を実現したいと切望していた。1914年に帰国したガンディーは、一年間政治的発言を控えてインド各地を巡ったあと、いくつかの地方の政治運動で主導的役割を果たし<sup>18)</sup>、インドの農民や労働者など最も社会の底辺で苦しんでいる人々と出会っていった。また、キラファット運動<sup>19)</sup>にも積極的に関わり、インドでの様々な宗教的相違を超えた（特にヒンドゥー教徒とムスリム）、心からの融和を課題として模索していた。その後、第一次世界大戦後のインドの自治を求めるナショナリズムの大きなうねりの中で、ガンディーの示すサットイヤグラハ運動（非暴力的非協力運動）に政治的な手段として大きな期待が寄せられた<sup>20)</sup>。1920年にインド国民会議派（Indian National Congress）の指導権がガンディーに託され、段階的市民的不服従運動が展開され始めた<sup>21)</sup>。しかし、ガンディーにとって決して譲ることのできない非暴力が徹底されないまま、運動が急激に広がっていき、1922年に暴力的なチョウリチョウラ事件がおこったとき、ガンディーはただちにすべての運動を停止し、その責任を負って断食をした。その直後、ガンディーを始めとした主だった指導者たちは投獄された。この後ナショナリズムの運動は停滞し、コミューナリズム（宗派対立、南アジアでは特にヒンドゥー教徒とムスリムの対立の問題）が深刻化していく中で、ガンディーは同志からの要請に応じて自叙伝に取り組み、ガンディーが編集していた週刊誌に少しずつ連載したのである<sup>22)</sup>。

このように、ガンディーの自叙伝は、功をなし、名をなした人が自分の人生を静かに振り返って書いたものではなく、闘争のただ中で書かれたものである。インドでの大きな挫折を経て、ガンディーは南アフリカでのサットイヤグラハについて、そのエッセンスをインドの人々に広く知ってもらうために自叙伝を書いた。そのメッセージはガンディーが自叙伝の副題を「真理実験の物語」（The Story of My Experiments with Truth）としたことに明確に表されている<sup>23)</sup>。

そのメッセージには、今日的意義があると思われる。自叙伝の最初の「はしがき」にガー

ンディーはメッセージを凝縮させて提示しているが、それによると、ガンディーは自分の生きる目的について次のように述べている。

わたしがなしとげようと思っていること——ここ三十年間なしとげようと努力し、切望してきたことは、自己の完成 (self-realization)、神にまみえること (face to face with God)、人間解脱 (モクシャ) (moksha, or salvation) に達することである。この目標を追って、わたしは生き、動き、そしてわたしの存在があるのである。語ったり、書いたりするやりかたによるわたしの行為のいっさいと、政治の分野におけるすべての私の冒険は、同じ目的に向けられている。(下線は宇野による)<sup>24)</sup>

英文を読めば明確であるが、ガンディーが生涯の目的としてきたもの、自己の完成、神にまみえること、そしてモクシャは、三つの別々なものではなく、一つの目的である。その目的とは真理であり、神である。その目的に向かっての日々の歩みを、ガンディーはサッティヤグラハ、真理実験と名づけた。ガンディーはその目的へ向かって、一心に探究を続けてきたが、自叙伝を書いているガンディー自身まだ途上にあった。そしてそれは絶対的真理、神をまだ会得していない現段階では相対的真理を道しるべとするものであり、「光に導かれての前進」であった<sup>25)</sup>。

一体いつこのような自覚が生まれたのかと考えると、「三十年間ひたすら」とあるので、自叙伝を書き始めた時から約30年間遡るなら、それは南アフリカに到着してまもない出来事が契機となっていることが明らかとなる。

この道すじをガンディー自身が振り返ると、実はその自覚が生まれる以前からすでに自分は常に導かれ、すでに真理追究の物語は始まっていた、ということで、この自叙伝の第一章は「生まれと両親」から始まっている。自分がそうであったように、自覚していない人々も本来は同じ目的に向かって歩む兄弟姉妹である。このように、この自覚に基づいて歩む過程で明確になったのは、自叙伝の「別れの辞」でガンディーが書いているように真理への道すじは非暴力であり、自分自身をゼロにする徹底的な謙虚さが不可欠であるということである<sup>26)</sup>。

この目的にむかっただけの歩みこそが、ガンディーのたえざる自己変革の源泉である。そして自分自身もはるか遠くの目的へと歩み続けられるように祈ってほしい、そして、共にこの道を歩んで欲しいという祈りによって、自叙伝は結ばれている<sup>27)</sup>。このように、ガンディーを理解するにあたって、真理を一心に求めて生きるという自覚こそがガンディーの視座であり、真理を求めての実験によって、日々新しく生まれることが自己変革であり、その歩みこそがガンディーの生きた枠組みである。そしてガンディーを理解するためには、私たちが実はそれぞれが自分自身のおかれた場所で、同じように日々一歩一歩生きることを通してのみ理解できるものである。

## 内なる声に耳を傾ける

それでは、南アフリカでどのようにしてガンディーは、自己変革の道筋をたどったのかをごく簡単に紹介する。南アフリカでの出発点、自叙伝に書かれている「30年間ひたすら」の出発点となったのは、次のような出来事である。アッテンボローの有名な映画『ガンジー』（1982年）に大変印象的に描かれているように、南アフリカ到着間もないガンディーは、港町から内地にある任務地プレトリアに向かうために列車に乗っていたが、有色人種であるということから、切符を持っていたにも関わらずその一等席から移動を強要され、拒否したところ列車から放り出され、一晩じゅうプラットホームの待合室で寒さに震えながら、自分の義務について考えた<sup>28)</sup>。自叙伝によるとガンディーは一晩中考えて次のような見解に達したのだった。

私が責務をはたさずに、インドに逃げ帰ったら、それこそ卑怯というものである。わたしのこうむった艱難は皮相にすぎなかった。——人種偏見という根深い病気の一つの症状にすぎなかった。できることなら、わたしはこの病気の根絶やしをやってみるべきだし、そしてそのための苦難は甘受すべきである。不正の償いにしても、わたしはただ人種偏見の除去に必要な範囲に限って追究すべきである<sup>29)</sup>。

このときのことを、後年ガンディーは振り返って「一生のうち、いちばん創造的な (creative) 経験だった」と述べている<sup>30)</sup>。

さらに、目的地プレトリアに到着するまで何度も人種差別の暴力に会い、生命の危険すら感じながら、やっとプレトリアについた時には、ガンディーはある意味で別人のようになっていた<sup>31)</sup>。その一つのしるしとして、インドで弁護士として失敗した一つの原因に人前で話ができないという致命的な内気さがあったものの、プレトリアでは在住インド人の集会を開き、彼らの艱難について耳を傾け、自分の意見をはっきりと述べ、具体的な提案をすることができた、ということがある。そして、その後約一年間かけて、当時のプレトリアのインド人で個人的事情に通じていない人はいなくなった、とまでガンディーは言っている<sup>32)</sup>。このことから、この旅の出来事はガンディーにとって決定的なものであった。

ナラヤン・デサイ氏は、この出来事によってガンディーは二度目の誕生をしたのだ、と指摘している<sup>33)</sup>。その意味は一度死んで、新しく生まれたと言うことであり、それは宗教的な表現を借りれば「メタノイア (Metanoia)」、すなわち悔い改め、という経験かもしれない。それはいったいどのような経験なのだろうか？

私は、この経験がガンディーにとってどのような意味があったのかを継続して考えてきたが、思いがけないところでヒントを見つけた。それは、ドイツの児童文学の最も素晴らしい作品のひとつであるミヒヤエル・エンデの『モモ』にあった。主人公の少女モモが、最後の対決の前の場面で、すべての仲間から引き離されてしまい、孤立無援で時間泥棒たち (灰

色の男たち)に追いかけられ、自分の身の安全を思って逃げまわっていたところ、不安と恐れでいっぱいになってしまうが、実は自分だけが友だちたちを助けることができると気がついた時に、心の向きが変わって恐れはなくなった、という箇所を読んだ時であった。

そこまで考えてきたとき、モモはきゆうにじぶんのなかにふしぎな変化がおこったのを感じました。不安と心ほそさがはげしくなってその極にたつたとき、その感情はとつぜん正反対のものに変わってしまったのです。不安は消えました。勇気と自信がみなぎりこの世のどんなおそろしいものがあるでも負けるものか、という気もちになりました。というよりはむしろ、じぶんにどんなことがふりかかろうと、そんなことはちつとも気にかからなくなったのです<sup>34)</sup>。

ガンディーも初めて自分自身の身に人種差別の暴力を受け、激しい恐怖や屈辱や痛みを感じたであろう。寒い中で一人駅の待合室に座り、大変な葛藤を感じたことが、自叙伝から読み取れる。その経験を乗り越えさせてくれたのは、自分は何者だろうか、自分の義務は何か、という根本的な問いであった。自分は今何をなすべきかという叫びのような問いかけ。その問いへの応答は、自分の内なる声との出会いであった。それは、後年のサッティヤグラハの種子をガンディーに植えつけた出来事であった、とデサイ氏は指摘している<sup>35)</sup>。

ガンディーも、自分の小さな身を守ることに気をとられていたときには恐れがいっぱいであったかもしれないが、内なる声が聞こえ、自分のなすべき義務がわかったときに、もはや恐れはなくなったのだ。この内なる声は、ガンディーが生まれ育てられてきた過程で植えつけられていながら、これまで自分自身自覚すらしてこなかった行動規範、道徳意識かもしれないが、それが危機に直面し苦しんでいたガンディーを助け、導いた。そしてそのことによって、恐れではなく勇気がわいてきたのであり、その直後から具体的な行動へと結びついた。その経験は、決定的な出発点として、生涯ガンディーの源泉となった。

どうしてこの経験を、「最も創造的な」と後年ガンディー自身が指摘したかということ、これまでの自己中心的生き方からの決別を意味し、真理への歩みへの自覚的一步となったからではないか。しかし、その道はその後も日々葛藤しながら歩み続けなければならないものであり、自分の弱さや欲望などにあふれた自分の心のなかに埋もれた、自分の内なる声に本当に謙虚に耳を傾けることは困難である<sup>36)</sup>。ガンディーは、生活のあらゆる領域において真理を目指して日々自己浄化を進め、無私の奉仕者として働く生き方が簡素な生活や祈りと労働を共にする共同体へと広がり、インドでもさらに実験が進められた。ガンディーはその過程で大きく自己変革を遂げ、世界の人々が驚嘆するような勇気のある生き方が実践できるようになった。

## 苦しんでいる同胞との出会い

ガンディーは、自分が苦境に置かれ傷ついたことから自分の内なる声に気づかされて自覚的な歩みが出発し、さらにその後、人種差別に苦しむ同胞たちとの出会いへとその歩みはさらに進んでいった。

南アフリカに赴いた当初、弁護士として経験の浅かったガンディーは、商人たちの訴訟事件という一年契約の仕事に真剣に取り組み、徹底的に資料を読んで事実を理解し、さらに関連する経理や簿記についても必死に勉強し、最終的には訴訟事件の双方からの信頼を得て両者の和解を導き、「ガンディー兄貴（ガンディーバーイ）」と周りのインド人たちに敬愛されるようになっていた<sup>37)</sup>。訴訟事件の仕事を終え、インドへ帰国する前にガンディーを囲んで送別会が開かれている最中に、ナタール州のインド人たちに与えられていた限定的選挙権を剥奪する法案についての小さな新聞記事にガンディーが気づいたことから、急遽ガンディーは帰国を延期することを要請され、陳情活動が開始された。この活動からナタール・インド人会議(Natal Indian Congress)が結成され、ガンディーはその書記となり、こうして全く思いがけない出来事からガンディーは、その後南アフリカでインド人たちの尊厳を守るために20年間活動することになったのだった。

当初のナタール・インド人会議は、会費を納められる比較的裕福なインド人が中心の活動であったように、南アフリカのインド人のコミュニティーはバラバラであった。しかし、ひとりの貧しい契約労働者バラスンダラムがガンディーの助けを求めたことから、次の突破口が開かれた。バラスンダラムが雇い主の暴力でケガをして、助けを求めてガンディーのもとを訪れ、その困難を解決すべく誠実にガンディーが行動した時から、ガンディーは契約労働者という社会の底辺におかれた人たちの悲惨な状況に耳を傾けるようになったのだった<sup>38)</sup>。

彼らは、もともとインド各地方から貧困からの脱却をもとめて契約労働者になった、最貧困層の出身の人々たちであり、南アフリカでまるで奴隷のような状況に置かれていた。一方、多くの裕福なインド人商人たちは、自分たちと契約労働者が白人によって同一視されて一緒に差別されまい、としていたのだった。しかし、このバラスンダラム事件の後、ガンディーのもとにたくさんの契約労働者たちが相談に来るようになり、その結果、「彼らの喜びと悲しみを学んだ」と自叙伝に書かれているように、彼らの声にガンディーは耳を傾け、彼らのために行動をした<sup>39)</sup>。これはカーストや出身地、宗教の違い、あるいは貧富の差によって分断されていたインド人社会の中では、例外的な行動であり、南アフリカのインド人たちを結びつけて行く力となった。そしてバラスンダラム事件は、ガンディーの名を、遠くインド本国でも知らしめる契機となったのだった。

## 「敵」を赦す

自分の内なる声との出会い、苦しんでいる同胞との出会い、そして次に特筆すべき事件

は、自分を傷つける「敵」との出会いではないだろうか。1896年にガンディーがインドへ一時帰国した際に、彼はインドの公の場で南アフリカのインド人の窮状を訴え、支援を要請した。だが、その発言を矮小化したロイター通信の報道によって南アフリカの白人たちが激怒した。そして間違った見解がそのまま広められ、「ガンディー憎し」の世論が沸き立つ中で、ガンディーが南アフリカに上陸しようとした時に暴行事件が起こった<sup>40)</sup>。港に集まっていた暴徒が、ガンディーを見つけ容赦無く取り囲んで襲撃した。激しい暴行を受け、たまたま通りがかった警察署長夫人の日傘で守られ、命からがら、その場からガンディーは逃げ出したのだった<sup>41)</sup>。後になって、そもそもロイター通信の報道が間違っていたことや、ガンディーへの様々な嫌疑が根も葉もなかったことが明らかになった。ナタール州政府の担当閣僚はガンディーに謝罪し、暴行した犯人たちを特定し逮捕するのに協力してほしいと述べたが、ガンディーはそれをきっぱりことわり、次のように述べたのだった。

わたしは加害者に責めを負わせる気はありません。彼らは、わたしがインドで、ナタルの白人について誇張して言い、彼らを中傷した、と思うように仕向けられたのでした。(中略) 真実がわかってくれば、彼らは彼らの行為を悔やむことだろうと、と私は確信します<sup>42)</sup>。

すでに「最も創造的な経験」の出発点でもガンディーは、人種差別という誤った制度に対して断固として「ノー」と表明するものの、人種差別を行った相手への怒りや憎しみを表明しなかった。この出来事でさらに激しい攻撃を受けたが、それでもガンディーは、「敵」をも敵と見なさない心の姿勢を身につけて実践した。重要なのは真理であり「敵」を憎むのではなく、不正を正すことであり、自分自身が受けた傷ではない。ガンディーは自分の命に危険が迫った時であっても、その信念をしっかりと持ち続けていられた。この毅然とした態度によってガンディーはインド人社会だけでなく白人社会からも尊敬を受けるようになった<sup>43)</sup>。

### 命をかけてたたかう勇氣

さらにガンディーは1899年にはボーア戦争で看護兵として従軍した。当時ガンディーは大英帝国の市民として、帝国内でのインド人の権利を守ることを政府に主張する立場であった。彼は権利を主張するからには市民としての義務を果たすべきと考え、ボーア戦争が始まった時に、南アフリカ在住のインド人に呼びかけて看護隊(野戦病院隊)を組織し、多くの元契約労働者たちと一緒に、戦場で武器を持たず、命がけで看護をし、けが人を運搬した。この時ガンディーは戦場で、共に身を捨てて奉仕する仲間を見いだした<sup>44)</sup>。この命がけで働くという経験はのちのち生かされていく。

その後、大都市ヨハネスブルグでペストが発生した時にはガンディーはいち早く、病人

を隔離する場所を作り、看護した。こうした危険を伴う任務をガンディーは人任せせず、自ら実践して行った。この経験からコミュニティーの衛生管理が重要だと理解し、インド人の各家庭をまわってトイレを調べ、衛生状況の改善に務めたが、これほど嫌がられる仕事はなかったとガンディーは述べている<sup>45)</sup>。嫌がられる仕事であったとしても、自分自身が義務と理解したら、ガンディーは人任せにせず率先して行なった。ガンディーは、報いを求めない無私の奉仕者としての生き方を、あらゆる状況のなかで常に追究していたのであった。

### 声なき声に耳を傾けて

さらに深刻な戦争の暴力にガンディーが直面したのは、1906年の「ズルー族の反乱」に、ふたたび野戦病院隊を率いて支配者イギリス側に従軍した時であった。その時の様子をガンディーは、実際には反乱ではなくて「人間狩り」だったと述べている<sup>46)</sup>。ガンディーたちは、敵ではないのに誤って負傷させられ、手当もされずに放置されていたズルー族の看護を命じられた。言葉が通じないズルー族の人々が、そのまなざしを通して精一杯の感謝をガンディーたちに伝え、ガンディーはそれをしっかりと受け止めた。徹底的に弱い立場におかれ、傷つけられ見捨てられたズルー族の人々から、ガンディーが聞いた、言葉にならないメッセージは、大変重く受け止められ、この経験はガンディーにとって大きな転機となった。

それはどういうものへと導いたか。ガンディーは任務のため、ズルー族の住む地域の人里離れた丘や谷間を歩きまわりながら、厳粛な静けさの中で「深い思索の中に落ち込むのであった」<sup>47)</sup>。そしてそこでの経験から、奉仕者として呼ばれたときにすぐに応えられるために、ブラフマチャリアの誓い（純潔、自己浄化の誓い）<sup>48)</sup>を立てたい、という強い内なる促しに気づいたのだった。この時にガンディーは、自然の中で大いなる存在に抱かれていた自分を自覚し、真剣にそこで耳を傾け、その応答として、今後どのように生きるべきかの具体的な方向性をうけとめ、自ら誓いを立てるという行動によってその決意を表現したのではないか。そして、その後家族や仲間と相談した上で、ブラフマチャリアの誓いを立て、無私の奉仕者として、大いなるものへ自らを委ねながら、一步一步前進する力を得た。ここにガンディーの声なき声に耳を傾けることの真骨頂があるのではないか。

貧しい契約労働者たちと苦楽を共にし、病に苦しむ人々を助け、踏みにじられ見捨てられているズルー族の人々を癒し慰め、この世界の現状の惨状に気がつけば、絶望的な状況ではある。大いなる自然の静けさの中でガンディーは、世界を支配しようとしている近代文明の暴力という巨大な重荷と闘うために、自分自身のうちに見いだした「真の文明」に学ぶ道しかないという確信に気づかされた。そして、インドの伝統がはるか昔から大切にしてきた自己放棄の道 (self-renunciation)<sup>49)</sup> が真理への歩みであり、無私の奉仕者として生きるという自分に与えられた道である、という揺るがない確信の表明が、1906年のブラフマチャ

リアの誓いであった。

ブラフマチャリアの誓いを立てるに至る以前に、すでに南アフリカでの真理実験は進められ、ガンディーの生活のあらゆる領域における簡素化の実験、自分の財産をつぎ込んで育てた週刊誌『インディアン・オピニオン』の出版、ジョン・ラスキンの著作に感動して始めたフェニックス農園とトルストイ農園での共同体の生活など、様々な批判や励ましを受け入れながら、ガンディーは自分の生活を改革し続け、自分自身の変革から家族やコミュニティの変革も進めて行っていた<sup>50)</sup>。

ここで、ガンディーの思想的マニフェストとして知られる『ヒンド・スワラージ、インドの自治』（1909年）についても考えたい<sup>51)</sup>。この著作を書いたのは、南アフリカでのインド人の尊厳を守るための運動が行き詰まり、それまでにない形でサッティヤーグラハ運動が誕生し展開したことが背景にある<sup>52)</sup>。そして、南アフリカの人種差別との苦闘の過程で、ガンディーは近代文明の本質について目が開かれた。そのことによって、植民地支配の重荷に苦しむインドの現状を、実は近代文明のくびきによって踏みにじられているのであり、近代文明、近代化をよいものと見なして喜んで受容しているインドのエリート、ナショナリストたちこそが、悔い改めて、インドの農村に生きる人々に学ぶべきだと主張するに至った<sup>53)</sup>。

『ヒンド・スワラージ』を書いた当時ガンディーは、自分自身の生活を簡素化し労働の生活を始めていたが、インドの農村で生活したことはなかった。それでもガンディーは、インドの農村に脈々と生き続けてきた「真の文明」は世界に誇るべきものであり、それは人間におのれの義務の道を教えるものである、と定義している。それに対して近代文明は、南アフリカのインド人の運動を通してますます明らかになって来たのであるが、神から顔を背けさせるものであり、徹底的に人間の尊厳を奪うものであると言う。どこからその確信は生まれているのか。それは声なき声に耳を傾けて、内なる声の招きに必死に格闘して行く、という真理実験の歩みを通して明確になっていったものであった。

### 真理において結ばれる人々の姿

こうした準備過程は、ガンディーが日々目の前の課題に誠実に取り組むうちに、知らず知らずのうちに進められていた。だが、南アフリカの人種差別的状況は改善されず、インド人の尊厳を容赦無く傷つける状況はますます進んでいった。そして、ガンディーたちのこれまでのあらゆる方策が行き詰ったときに、サッティヤーグラハ運動が1906年9月に誕生した。それは、あたかも地下水が堰きとめられることができずとうとう湧き出てきたようなものであった、とデサイ氏は描写している<sup>54)</sup>。

南アフリカにおけるサッティヤーグラハ運動は、暗黒法と呼ばれたアジア人登録法に徹底的に抵抗し、従わないことを神の御前に誓うことから出発したが、それはガンディー自身にとっても、全く思いがけない展開であった。その年の12月に、ガンディーは初めて逮捕され、翌年の1月には禁固刑二ヶ月の判決を受けて、初めての投獄生活を経験した。そこ

での苛酷な経験は想像を絶するものであり、その苦難を乗り越えるのは容易でなかった<sup>55)</sup>。逮捕・投獄にも関わらずその後も運動は続けられ、ガンディーも 1908 年に再び逮捕され、投獄生活を送りその苦難から多くを学んだ。

インド人たちが恐れずに投獄され続け、とうとう政府要人のスマッツ将軍は、ガンディーと協定を結び、ガンディーを釈放した。スマッツ将軍との約束を果たすため、自主的登録に臨もうとしたガンディーは、同胞のパタン人から裏切りを疑われ、襲撃されて大怪我を負った<sup>56)</sup>。その時、まさに痛みと苦しみの中で、ガンディーは襲撃犯たちを訴えるのを拒否し、次のような声明を出したのだった。

あの行為をおかした人たちは、自分が何をしたか知らなかったのです。彼らは、私がかか間違っただけのことをしている、と思ったのです。彼らは、知っているただ一つのやりかたで私を矯正しようとしていました。したがって、私は彼らに対しては、どんな措置もとらないように要求します<sup>57)</sup>。

怪我をしたガンディーは、ジョセフ・J・ドークのうちで看病された。ドークはイギリス人のバプテスト派の牧師で、事件の少し前に南アフリカに赴任して、自分からガンディーに会いに行き、ガンディーとインド人たちの運動に深く感銘を受けたのだった。ドークはその後も様々な形でインド人たちの支援を行ない、ガンディーの初めての伝記を書いた。そこでのガンディー像は、『インドの自治』を書いた頃のガンディーの到達点をよく表している<sup>58)</sup>。

ドークは、ガンディーと初めて出会って大変驚いたことを、その伝記の最初に述べている。ガンディーは謙虚で、会う人が自分のことが恥ずかしくなるような人であった、とドークは述べている。そして、長年にわたって培われて来た簡素な生活、誠実さ、金銭や名誉に対する無私無欲、こうしたことから、南アフリカのインド人コミュニティーに広く深く敬愛されていた<sup>59)</sup>。初めて出会って、じっくりと話を聞き、別れるときにはすっかり友人となっていた、と記している。

そしてドークは、怪我をしたガンディーを家族の一員として自分の家に迎え、大切に世話をした。当時は人種差別が当たり前であったことを考えると、ドークの行動は大変心を打つものである<sup>60)</sup>。

ドークによるガンディーの伝記は、南アフリカのインド人問題が重要な問題を提起していること、そしてその中心的人物であるガンディーが信頼にあたいする素晴らしい人間であることを西洋の人々に伝えようとして、ドークが心をこめて書いたものである。特に印象的なことは、その中にドークが理解したガンディーたちの運動の中心にあるヴィジョンがあるエピソードを通して描かれていることである。それは、ドークによると、神の愛の表れであり、ガンディーの理想のヴィジョンの発露であるが、大変厳しい困難な状況の中

で、宗教、人種、信条、国籍や様々な違いを越えて、人々が互いにいたわり合い、共に心から祈り合って支えている姿を、ありありとした現実として描いている<sup>61)</sup>。

それはこのような出来事であった。運動の過程で、ヒンドゥー教徒でタミル人のリーダー、タンビ・ナイドゥーが、3回目の投獄で重労働の刑を受けたため、出産後数日しか経っていない彼の奥さんを慰めに、ガンディーとドークはナイドゥーの家を訪ねた。途中ムスリムの導師とユダヤ人の友人も加わり、キリスト教徒のドークと、ヒンドゥー教徒のガンディーと、皆一緒に連れ立って行った。そして、息子の一人に支えられて涙を流しながらようやく立っている奥さんに、それぞれが心を込めて励ましの言葉をなげかけた。そして、それぞれがそれぞれの言葉で祈ったのだった。

言葉にならない悲しみと苦しみを、立場や宗教の違いを越えて受けとめ、共に祈り、共に生きること。これこそがガンディーの真理に向かったの日々の歩みを支えたヴィジョンである。このヴィジョンに生きるためには、声にならない声に日々真摯に耳を傾ける心がまえが必要ではないだろうか。デサイ氏の本の序文で、ダライ・ラマ 14 世は、自らをガンディーのあとを歩むものとして位置づけ、その真理への歩みの中核にある非暴力とは慈悲 (compassion, 悲しみや苦しみを共にすること) である、と述べているが、このヴィジョンとはまさにその働きではないだろうか<sup>62)</sup>。

## 祈りとは何か

最後に、祈りについて私にヒントを与えてくれた文章を紹介する。それはアメリカ出身で、多くの動物を主人公とした美しい物語を書いた、ポール・ギャリコという小説家の「ルドミーラ」という短編の中で見つけたものである。ルドミーラは、リヒテインシュタインの山村の農民たちや乳牛を守る、守護女神の名である。みっともなくして乳もあまり出ないある牝牛が、ルドミーラの小さな祠の前で捧げた言葉にならない「祈り」、豊かに乳をほとぼしらせて皆に分け与えたいという切なる願いについて、次のように述べられている箇所、祈りとは何か、ということが集約されているように思われたのである。

なぜなら祈りというものは、べつに言葉に出して唱える必要はありません。箇条書きで申し立てたり、教会の中で声には出さず唇だけ動かしたり、空にむかってしゃべったりするにも及びません。祈りとは無言の心の願いであり、にわかな愛のほとぼしりでありましょう。それは一瞬のうちに魂を無限なもの、善なるものに結びつける切なる願いであり、いいようもなくいやしめられた者にとる態度であり、すべてが失われたと思っ  
たときの闇をついて助けを呼ぶ声であり、歌であり、詩であり、なさけある行いであり、美への到達であり、さもなくば内なる信仰の力づよい静かな確認です。

祈りとは、じつに、神によってつくられ神に還ってゆく何者かなのでしょ<sup>63)</sup>う。

このことから、祈りというものの自体が神（真理）からの招きであり、人間を生かしているものであるけれど、ふだんは耳を傾けもしない、という状況なのではないだろうか。ガンディーは、南アフリカの出発点の出来事で、自分の内側から発せられた「祈り」を発見し、自分自身の内なる声、そして周囲の苦しんでいる人々の声にも耳を傾け、「敵」をも敵と見なさず、一心に真理に向かって歩みはじめた。その歩みを通して、自己を変革し、社会を変えていく力を見いだした。その生き方に接したときに、多くの人々は、自分自身の内なる促しに気がつかされ、勇気を与えられたのではないだろうか。

本論では、南アフリカ時代の出発点に焦点をあてて検討した。ガンディーがその後も、なゼインドの民衆の苦しみや悲しみを共有することができたのか、そして、ガンディーの招きに応じて恐れを捨てて、サットィヤーグラハ運動に身を投じた、たくさんの人々がなぜいたのか、という秘密が、ここに隠されていることを指摘しておきたい。

ここで少し歴史的コンテクストを離れるが、一つのエピソードを紹介して終わりたい。ガンディーは1944年9月に、ムスリム分離主義を主張するM. A. ジンナーと、18日間にわたって話し合いをした。インドを分割してパキスタンというムスリムの国を作ることを要求するジンナーの主張が、急速に影響力を拡大し、ますます宗教対立（コミュニアリズム）が深刻化していることに、ガンディーは危機感を持ち、ジンナーに自分から望んで会談したのである<sup>64</sup>。その交渉を始めるにあたって、ジンナーは、自分は全インドのムスリムの代表者であり、インド国民会議派はヒンドゥー組織であり、ガンディーはその代表のヒンドゥー教徒として交渉に臨んでいると認めよ、とガンディーに迫った。それに対しガンディーは、自分は、一人の求道者(seeker)としてジンナーに会いにきたのであり、自分は自分以外の誰をも代表していないが、その願いとしては、インドの人々が階級やカーストや信条の違いに関わらず共有している悲惨や苦しみを、自分の身の内にうけとめている、という意味では、全てのインドの人々を代表してこの場に来ている、と述べた<sup>65</sup>。そのような立場をジンナーは拒否し、結局は話し合いは失敗に終わった。しかし、多くのインドの民衆にとって、ガンディーは自分たちの苦しみ、悲しみを一心に背負って共に歩むリーダーであった。

ガンディー亡き後、ガンディーは真理への道は非暴力にある、という確信を今もなお伝え、すべての人々がそれぞれの場で、真摯に『真理実験の物語』を生きることへと招き、祈っている。私たちがまずすべきことは、この真理からの招きに耳を傾けることではないだろうか。全てを奪われて、苦しんでいる人々こそが、この声に必死で耳を傾けている。ガンディー亡き後も、ガンディーの招きに出会った人々が、困難な中で勇気を持って闘い続けているのは、世界中にこの、声なき声が今も響き続けているからではないだろうか。

## 註

- 1) インド初代首相となったJ. ネルーは、ガンディーの教えの核心を「アバヤ、すなわち恐怖しないということ」であり、その教えは全民衆への最大の贈り物であった、と述べている。J・ネ

ルー『インドの発見（下巻）』（辻直四郎その他訳）、岩波書店、1956年、502-3頁。

- 2) このガンディーの発言はあまりにも有名であるが、たとえば Eknath Easwaran による、アメリカの一般読者向けにガンディーの生涯を写真とともに紹介した本 Eknath Easwaran, *Gandhi The Man*, (Nilgiri Press, 1997), 140. を参照のこと。
- 3) Narayan Desai, *My Life is My Message Vol. I, Sadhana (1869-1915)* (originally written in Gujarati, translated to English by Tridip Suvrud), (Orient BlackSwan, 2009). ナラヤン・デサイ氏は長くガンディーの秘書を務めたマハデヴ・デサイの息子であり、ガンディーのサッティヤグラハ・アシュラム（共同体、道場）で生まれガンディーの膝の上で育った。人生の約三分の一を生前のガンディーと生き、残りの三分の二をガンディーの霊的存在 (spiritual presence) の元で生きて来たと述ベ (“Preface”, xi)、ガンディーと共に生きる喜びを分かち合いたい、とこの四巻にわたる伝記を書いた。ガンディーの伝記や研究書は数え切れないほど出版されているが、ガンディーのエッセンスを自分自身の生きる中心として受け止めているナラヤン・デサイの描くガンディー伝は、大変貴重な稀有の証言である。ICU ガンディー研究会では、葛西實 ICU 名誉教授と共にこの本を読んでいる。デサイ氏はガンディーの生涯を語るに当たって、最も重要なメッセージとしてこの伝記全体の副題を *My Life is My Message* としている。残念なことにナラヤン・デサイ氏は 2015 年 3 月に亡くなられた。
- 4) Satyagraha、真理 (Satya) をしっかりとつかむ (agraha)、という二つのサンスクリットの言葉から作られ、南アフリカで誕生したインド人たちの運動を表す言葉として使われた。そして真理をつかもうとする中から生まれてくる力を意味している。ガンディーにとってそれは政治的方法だけではなく、生きることに全般に関わる真理実験を意味した。M. K. Gandhi, “Ch.XII The Advent of Satyagraha,” *Satyagraha in South Africa*, (originally published in 1928), (Navajivan Publishing House, 1972), 102.
- 5) ビパン・チャンドラ「日本語版への序文」『近代インドの歴史』（粟屋利江訳）、山川出版社、1991年改訂版、iii 頁。
- 6) ガンディーについて出会いと対話を通して学んで来たことについて、すでに別稿でも論じている。宇野彩子「マハトマ・ガンディーの近代文明批判と 3.11 以降の日本」『アジア文化研究別冊 20 号』、国際基督教大学アジア文化研究所、2014 年、67-68 頁。
- 7) 南アジアの分離独立 (Partition) をガンディーは命がけで反対したが、当時のインドの指導者たちは、英国からの権力移譲 (Transfer of Power) を強く望み、ガンディーの意向を無視して受容するに至った。分離独立は多大な暴力と悲惨を伴い、独立後のインドはパキスタンと敵対し、非暴力を原則としない国家体制となった。たとえば最近日本で出版された、C・ダグラス・ラミス『ガンジーの危険な平和憲法』集英社新書、2009 年には、独立後のガンディーの提案が「危険」とされたことが描かれている。
- 8) 現インド首相のナレンドラ・モディは、ヒンドゥー・ナショナリズム（インドのヒンドゥー至上主義）の政党インド人民党 (BJP) のリーダーである。そもそもガンディーを暗殺した人物、N・ゴドセは、ヒンドゥー・ナショナリズムの信奉者であった。モディ首相は、日本の安倍首相とも親密な関係を構築し、軍事的にも経済的にも世界の大国となることを目指し、日本からの原子力発電所の輸入や新幹線の技術の導入などを約束している。特に原子力発電所の輸入に対して、故ナラヤン・デサイ氏も生前精力的に反対運動を展開していた。
- 9) 2007 年に国際基督教大学アジア文化研究所が中心になって主催した、国際シンポジウム「日印文化交流の今日的意義：グローバル化の中の真の豊かさとは」に招いた、スングルラール・バフ

グナーさんご夫妻との出会いからさらに連なって、2008年にICUで講演されたバンドゥラング・ヘグデ氏も、インドの環境保護運動の指導者としてガンディー思想を継承している。インドのガンディー思想と環境保護運動については、石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動——ガンディー主義と〈つながりの政治〉』昭和堂、2011年を参照のこと。

- 10) 現代世界において、絶望的な状況におかれてガンディー思想に光を見出してを行動して来た人々は、アメリカのM. L. キング Jr 牧師、チベットのダライ・ラマ 14 世、南アフリカのネルソン・マンデラなど、インドの外に見出される。葛西實「インドのビジョンと祈り——M・K・ガンディーの証言」『サルボダヤ』、日印サルボダヤ交友会、2010年2-3月合併号、8-15頁を参照のこと。
- 11) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 30 “Sadhana,” 280-291 (サダーナとは修行の道) でデサイは、南アフリカでの20年間のガンディーの自己変革について、大変厳しい「修行」であったと述べている。
- 12) ガンジー「はしがき」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』(蠟山芳郎訳)、中央公論社、1979年、67-8頁。
- 13) 奉仕者としての召命について、宇野彩子、前掲論文、2014年、71頁、注20でも紹介している。M. K. Gandhi *Satyagraha in South Africa*, 306にも南アフリカでの21年間の自分の生涯の召命を自覚した場所であることを述べている。
- 14) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 33 “Truth and the Spirit of Service,” 320-8. 特に「ガンディーにとって奉仕は真理への道であった(328)」。  
非暴力を信望して社会改革を進めた指導者たちに、「奉仕」の重要性は、一つの共有された自覚である。アメリカ公民権運動の指導者M. L. キング Jr. 牧師も、奉仕について次のような言葉を残している。“Everybody can be great. Because anyone can serve. (...) You only need a heart full of grace. A soul generated by love.” from Martin Luther King, Jr, *The Words of Martin Luther King, Jr. (Selected and introduced by Coretta Scott King)*, (Newmarket Press, 1984), 17. また、「辺境のガンジー」と呼ばれたムスリム指導者のアブドゥル・ガッファー・カーンは、北西辺境州のパタン(パシュトゥーン)人たちを、非暴力の誓いによってまとめたが、その活動の中心は奉仕であり、神ご自身には奉仕できないので、同胞に奉仕する「神の奉仕者団」を結成した。ガンディーが政治的な師(グル)と仰いで尊敬していた、インド国民会議派の穏健派リーダーであったG. K. ゴーカレは、インド奉仕者協会を結成していた。このように、「奉仕」を課題とする生き方において、宗教や人種の違いを超えてガンディーと共通点が見られ、自己中心の生き方と正反対のものであり、同胞への愛から自ずから生まれる行動であり、真理(神)への道として理解されていた。
- 15) M. K. Gandhi, *Autobiography or the Story of My Experiment with Truth (originally published in 1927, 1929 in 2 volumes)*, (Penguin Edition, 1982). 本論文では、『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』(蠟山芳郎訳)、中央公論社、1979年を使っている。他にも(グジャラートから)『東洋文庫 671-2 ガンディー自叙伝1・2 真理へと近づくさまざまな実験』(田中敏雄訳)、平凡社、2000年。M. K. Gandhi, *Hind Swaraj or Indian Home Rule (originally published in 1909)*, (Navajivan Publishing House 1938). M. K. ガンディー『真の独立への道(ヒンド・スワラージ)』(田中敏雄訳)、岩波文庫、2001年。
- 16) 宇野彩子「マハートマ・ガンディーの近代文明批判と3.11以降の日本」『アジア文化研究別冊 20号』、国際基督教大学アジア文化研究所、2014年、69-70頁。
- 17) 本論文は、葛西實教授との長年にわたる対話から学んだことをもとにしている。特に、ガンデ

イーの視座と枠組みの重要性については、葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」『アジア文化研究 22 号』、国際基督教大学アジア文化研究所、1996 年、193-207 頁に多くを負っている。

- 18) チャンパランの農民争議、アーメダバードの労働者争議などについては、ガンディーの自叙伝にも詳しい。そして、まさにチャンパランでの農民との出会いによって、ガンディーは「わたしは神と非殺生（アヒンサ）、それから真実（サツティヤ）にまみえることができた」と述べ、この出来事がガンディーにとって決定的な重要性を持っていたことを語っている（「第 7 部 66 章 非殺生（アヒンサ）に直面して」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』、302 頁）。これは葛西教授の研究会での指摘によって気がつかされたことであり、あらためて深く感謝する。その物語については Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 2 Satyagraha, Chapter 4 “Champanan” を参照のこと。アーメダバードの労働争議については、この事件こそがガンディーがインド全体の指導者として台頭するために不可欠の事件としてとりあげた、E. H. エリクソン『ガンディーの真理——戦闘的非暴力の起源 I・II』（星野美賀子訳）、みすず書房、1973-1974 年が非常に興味深い。エリクソンはそれまでのガンディーの歩みを真理実験として心理学的に捉えた上で、この事件を詳細に論じている。また、Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 2, Chapter 5 “Ahimsa in the Textile City” も参照のこと。
- 19) Khilafat movement とは、第一次世界大戦において英国と敵対関係となったオスマン・トルコ帝国のスルタン（政治的支配者）がイスラームの聖地を守護し世界のムスリムにとっての共通のカリフ（宗教的指導者）であるという見解を共有するムスリムたちが広げた「カリフを守れ」という運動であった。特に第一次世界大戦が終わり敗戦国となったトルコのカリフの処遇を巡って、インドのムスリムの間で彼らの宗教的心情に英国支配者が十分配慮していないという不満が広がった。ガンディーはヒンドゥー教徒でありながら、この運動に深く関わり、ヒンドゥー教徒とムスリムの真の友情を実現することを願って指導的役割を果たした。
- 20) 背景として、第一次世界大戦のあいだイギリス支配はインドのナショナリズムなどの動きを徹底的に封じ、インドからの人的・物的・経済的支援を大規模に動員させた。そのため戦後の自治拡大への期待が広がっていたが、戦争終結後も厳しい治安維持を最優先する姿勢のイギリス支配に対して、反発が広がり自治を求める機運が高まっていた。そこでガンディーの呼びかけに応えてローラット・サツティヤグラハが行われた。
- 21) インド国民会議派は 1885 年に発足しその後 1947 年の分離独立に至るまでイギリス植民地支配にたいする全インド的ナショナリズムの担い手であった。1920 年 12 月以降ガンディーの指導のもと、“Swaraj in a year” 「一年でスワラージを」というスローガンを掲げてこれまでにない勢いで自治獲得を目指す運動が展開していった。
- 22) 自叙伝を書いた経緯については、ガンジー「はしがき」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979 年、65-66 頁。
- 23) 真理を追い求めて実験を重ねる生き方がサツティヤグラハである。“It is a way of life.”, Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, “Nandi,” xxi.
- 24) ガンジー「はしがき」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979 年、67-8 頁。英語版では以下のように書かれている。

“What I want to achieve—what I have been striving and pining to achieve these thirty years—is self-realization, to see God face to face, to attain moksha (salvation). I live and move and have my being in pursuit of this goal. All that I do by way of speaking and writing, and all my ventures in the political field, are directed to this same end.” *Autobiography or The Story of My Experiments with Truth*,

- originally published 1927, 1929 in two volumes, Penguin Edition published 1982, “Introduction” 15.
- 25) ガンディー「はしがき」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、69頁。葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」『アジア文化研究 22号』、国際基督教大学アジア文化研究所、1996年、195-7頁。
  - 26) ガンジー「別れの辞」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、378-9頁。
  - 27) 「別れの辞」の最後の文章。同上、379頁。
  - 28) R. アッテンボロー『ガンジー』は1982年に公開されてインドを含めた世界各地で大変高く評価された。「最も創造的経験」におけるガンディーの葛藤については、宇野彩子「マハートマ・ガンディーの近代文明批判と3.11以降の日本」『アジア文化研究別冊 20号』、国際基督教大学アジア文化研究所、2014年、70頁でも検討している。
  - 29) ガンジー「第三部 19 南アフリカに到着」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、146頁。
  - 30) 同上、147頁。この「最も創造的な経験」の出来事について、Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 15 “The Most Creative Experience,” 107-117. を参照。
  - 31) 葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」『アジア文化研究 22号』、国際基督教大学アジア文化研究所、1996年、195-6頁。
  - 32) ガンジー「23 インド人問題」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、161頁。
  - 33) 特に“twice-born”について、Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, 115.
  - 34) ミヒヤエル・エンデ『モモ』（大島かおり訳）、岩波少年文庫 127、2005年、329頁。
  - 35) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, 115-7.
  - 36) ガンディーはヒンドゥー教の聖典中の聖典である『バガヴァッド・ギーター』の教えの中核として、「最大の戦場は自分自身のうちにある」と理解していた。Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, 292.
  - 37) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Ch. 19 “Gandhibhai,” 152-162.
  - 38) 契約労働者のおかれていた奴隷のような厳しい状況について、Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 26 “Girmitiyas,” 227-238.
  - 39) ガンジー「27 三ポンド税」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、170頁。
  - 40) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 29 “Forgiveness: The Ornament of the Brave,” 264-279.
  - 41) この警察署長夫人の勇気ある行動については自叙伝や、Philip Glass のオペラ *Satyagraha* (1979) にも描かれている。
  - 42) ガンジー「第四部 29 南アフリカへの嵐の到着」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、183頁。
  - 43) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Ch. 29 “Forgiveness: The Ornament of the Brave,” 279. ずっと後年だが、ガンディーが南アフリカを帰国するときに、スマッツ将軍にガンディーは自分で作ったサンダルを贈り、スマッツ将軍もそれを大切に受け止めた。政治的には激しく「敵対する」関係にあったが、互いへの深い尊敬の念は失われなかったことはサッティヤーグラハ運動の特質をよく表しているといえよう。Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, 581.

- 44) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 36 “A Strecher Bearer,” 359–366.
- 45) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 33 “Truth and the Spirit of Service,” 321–2.
- 46) ガンジー「45 ズルー族の反乱」、『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、229頁。
- 47) ガンジー「46 ブラフマチャリア」、『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、229–230頁
- 48) ブラフマチャリアとは、神と共に歩むという言葉から。純潔、禁欲の誓いであるが、肉体的な自己抑制にとどまらない。ガンディーは1906年にこの誓いを立てたが、それは奉仕者として生きるためには不可欠であり、「わたしは肉と霊の双方を求めて生活はできなかった」からと述べている。ガンジー「46 ブラフマチャリア」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、230頁
- 49) 報いを求めずに行動するという事はヒンドゥー教に限定されない宗教的な生き方ではないかと思うが、古くからヒンドゥー教の基本的姿勢として教えられている。正しい行動を行うことが大切であり、結果は神に委ねる。自己放擲ともいう。バガヴァッド・ギーターの教え。『バガヴァッド・ギーター』（上村勝彦訳）、岩波文庫、1992年。特に上村氏による「解説」225–7頁を参照のこと。
- 50) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Chapter 30 “Sadhana,” 280–291 に南アフリカでの約20年間にわたる「修行」による自己変革と社会的変革について集約してデサイ氏は描いている。
- 51) より詳しくは、宇野彩子「マハトマ・ガンディーの近代文明批判と3.11以降の日本」『アジア文化研究別冊20号』、国際基督教大学アジア文化研究所、2014年、71–73頁にも論じている。
- 52) 南アフリカでのサットィヤーグラハ運動の展開についてガンディー自身が書いた記録がある。M. K. Gandhi, *Satyagraha in South Africa (originally published 1928, reprint,1972)*, (Navajivan Publishing House, 2008).
- 53) ガンディー「第8章 インドの状態」『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』（田中敏雄訳）、岩波文庫、2001年、49頁。
- 54) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, Ch. 45 “Satyagraha: The Birth,” 512.
- 55) Gandhi, *Satyagraha in South Africa*, Ch. XX “A Series of Arrests,” 138–142.
- 56) パタン人とはインド北西辺境州の勇猛果敢な自主自尊の人々として知られ、ボーア戦争にイギリス軍の兵士として南アフリカにわたってきていたパタン人たちがいた。のちにガンディーと行動を共にしたムスリムの指導者アブドゥル・ガッファー・カーンはこのパタン人のリーダーであった。パタンの人々とガッファー・カーンについて、宇野（徳田）彩子「一つの家族としての人類意識——マハトマ・ガンディーとアブドゥル・ガッファー・カーン：二人の奉仕者」『アジア文化研究別冊10号』国際基督教大学アジア文化研究所、2001年、33–68頁。
- 57) ガンジー「第六部 53 襲撃」『世界の名著 77 ガンジー／ネルー』（蠟山芳郎訳）、中央公論社、1979年、255頁。
- 58) J. J. Doke, *Gandhi—A Patriot in South Africa*, first published in 1909, reprinted 1992, Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India)（最初のイギリスでの出版は *Hind Swaraj* より先に出版された）。
- 59) Doke, *Gandhi—A Patriot in South Africa*, 92. 初めてガンディーにあったときの印象について、Ch. III “The Man Himself,” 10–12.
- 60) この出来事とドークとの関わりについてガンディー自身が感謝をこめて書いている。Gandhi,

*Satyagraha in South Africa*, Ch. XXII “Opposition and Assault,” 154–9.

- 61) このエピソードについてドークは、“It was one of the many glimpses which we have lately had of that divine love which mocks at boundaries of creed and limits of race or colour. It was a vision of Mr. Gandhi’s ideal.”と述べている。Doke, *Gandhi—A Patriot in South Africa*, 108–9.
- 62) Narayan Desai, *My Life is My Message*, Vol. 1, “Foreword,” by Dalai Lama 14th, ix–x.
- 63) ポール・ギャリコ「ルドミーラ」『スノーグース』（矢川澄子訳）、新潮文庫、1988年、131–2頁。
- 64) 宇野（徳田）彩子、前掲論文、2001年、53–56頁。
- 65) “Letter to M. A. Jinnah” (Sept. 15, 1944), *Collected Works of Mahatma Gandhi*, Publications Division of the Government of India, Navajivan, 1958–1994, Vol. 78, 103.